

al-Jāsim) と共に民主フォーラム候補として第2選挙区から出馬したものの、残念ながら両名とも当選することはなかった。しかし、クウェートの議会政治の始まりともいえる1921年と1938～1939年の議会設置運動は、民族主義思想の影響を強く受けたものであったことや [保坂1998]、独立後における60～70年代の国民議会においてこの勢力が大きな影響力を有していたことを考えれば、同組織の思想を知ることはクウェート政治を考えるうえで必要不可欠であるといえよう。

クウェートの民主主義は、現在大きく変容しつつある。そして、近年における同国の経済的重要性の増大と相まって、90年代以降の民主化に向けた一連の政治改革²⁰⁾が行われ、80年代からイスラーム主義勢力が伸長するなど、今後、同国の政治は世界の注目をさらに集めることになるであろう。本書は、クウェート政治において長い伝統を持つ民主フォーラムの視点を中心としながら、今日のクウェート社会に内在する多様な民主主義の理解の一例を提示してくれる文献として、意義のある一冊であるといえよう。

参考文献

- 大隈宏 2000 「政治発展（論）」猪口孝他編 『政治学事典』弘文堂, p. 608.
- 保坂修司 1998 「クウェートの民主主義——国民議会の展開」『中東・イスラーム世界の国家体制と民主化』国際問題研究所, pp. 48-76.
- 2001 「クウェート国憲法」『中東基礎資料調査——主要中東諸国の憲法』日本国際問題研究所, pp. 199-254.
- 2005 「クウェートの民主主義——発展と課題」『湾岸アラブと民主主義』日本国際問題研究所.
- 牟田口義郎 1965 『石油に浮かぶ国——クウェートの歴史と現実』中公新書.
- Crystal, J. 1990. *Oil and Politics in the Gulf: Rulers and Merchants in Kuwait and Qatar*. New York: Cambridge University Press.
- 1996. “Civil Society in the Arabian Gulf,” in A. Norton, ed., *Civil Society in the Middle East*, New York: Brill.
- Ismael, J. 1993. *Kuwait: Dependency and Class in a Rentier State*. Gainesville: University Press of Florida.
- Kedourie, E. 1994. *Democracy and Arab Political Culture*. London: Frank Cass.
- Freedom House. 2007. <http://www.freedomhouse.org/template.cfm?page=363&year=2007> (2008年5月30日閲覧)
- Canadian Security Intelligence Service. <http://www.csis.gc.ca/> (2008年7月3日閲覧)
- Al-Watan* (2008年5月18日付)

(平松 亜衣子 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)

Kamran Scot Aghaie ed. 2005. *The Women of Karbala: Ritual Performance and Symbolic Discourses in Modern Shi'i Islam*. Austin: Texas University Press. xii+297 pp.

シーア派を語る際にカルバラーの悲劇を欠かすことはできない。ヒジュラ暦61年、カルバラー

20) 1992年の国民議会の再開、2005年の女性への参政権の付与、翌2006年の女性閣僚の誕生などが挙げられる。

の荒野で殉教した3代目イマーム、フサインと彼の仲間たちの悲劇的な物語は、その直後からシーア派の人びとの間でさまざまな形で語り継がれ、シーア派の人びとの政治・社会・文化をはじめとするさまざまな価値を定める思考の枠組みにまで発展してきた [Aghaie 2004: x, xi]。この思考の枠組みがカルバラー・パラダイムと呼ばれ、シーア派の個人や社会の価値体系を定めるだけでなく、ときに政治的な意味を帯び、社会変革をもたらす原動力にもなってきた [Fischer 1980]。特に1979年のイラン革命にその傾向が顕著に見られ、革命以後にイラン研究で特に注目を浴びている。

革命時、人びとは自らを善、正義、真実、勇気、自己犠牲といったものを代表するフサインの側に重ね合わせ、逆に王政を悪、不義、虚偽、傲慢さ、残酷さといったものを代表するヤズィードの側に重ね合わせるといった、カルバラー・パラダイムの構図がさまざまな場面で利用された。こうした対置が人びとの間に流布、浸透することで、王制への反抗や革命が正当化され、王制打倒、革命へと人びとを向かわせたことにイラン革命が成功した要因の一つがあるとの説が有力になっている。イラン革命におけるカルバラー・パラダイムの役割が強烈な印象を残したために、カルバラー・パラダイムの政治的側面に注目が集まり、さまざまな角度からのその政治性が研究されてきた [Fischer 1980; Dabashi 1993; Dabashi & Chelkowski 2000; Aghaie 2001]。

カルバラー・パラダイムは政治的側面を持つ一方で、上記の通りシーア派の社会的・文化的な価値を定めるものでもある。フサインやザイナブといったカルバラーの悲劇に関わった人物は、シーア派の間では時代を問わず理想的な人物であり、彼らの言動はシーア派の人びとの価値、思考や生き方を規定する枠組みとして機能してきた。アーシューラーやアルバイーンに見られるカルバラーの悲劇に関するシンボルと宗教行事は、こうした枠組みを確認する1つの手段である。しかしながらカルバラー・パラダイムの枠組みとそれに付随するシンボルや宗教行事は歴史を通じて同じものだったわけではない。時代や社会環境のさまざまな変化に応じて枠組みはつねに変化しており、カルバラー・パラダイムは形を変えながら、その時代時代に適合した枠組みをシーア派に提示してきたことは容易に想像できる。

本書の編者であるアガイエはそうした側面に着目し、『カルバラーの殉教者たち』 [Aghaie 2004] でカルバラー・パラダイムを政治的側面以外の社会的、文化的側面に拡大して論じている。本書では『カルバラーの殉教者たち』の問題意識を継承し、特にジェンダーの側面に注目してカルバラー・パラダイムの分析が行われている。編者であるアガイエは以下2点を本書の目的として掲げている。まず、カルバラーの女性たちがカルバラー・パラダイムの中でどのような役割を担ってきたのかを明らかにすること、次に、カルバラー・パラダイムの中で描き出される、女性の理想像としてのカルバラーの女性たちが、シーア派の女性たちにどのように受け止められているのかを明らかにすることの2点である。ここには、従来カルバラーの悲劇がフサインを中心とした男性の側から語られてきたことと、欧米の学者たちがカルバラー・パラダイムの政治的側面のみに着目し、その社会的・文化的側面を無視してきたことに対する編者の強い反発が見てとれる。本書にはカルバラー・パラダイムの適用範囲を、従来の政治、男性だけではなく、社会・文化・女性へも広げようとする意図とともに、イラン以外の研究者の論文も収録することで、今までイラン研究だけに限られてきたカルバラー・パラダイムの議論を、イラン以外の各地のシーア派コミュニティにも拡大しようとする野心的な試みも含まれている。

本書の編者であるカムラン・スコット・アガイエは、現在テキサス大学オースティン校の准教授の職にあって、イランにおけるカルバラー・パラダイムを重点的に研究しており、カルバラーのシンボルや宗教行事を対象に、カルバラー・パラダイムの持つ社会的・文化的側面、その中でもジェ

ンダーに着目しながら研究を進めている。では以下、各章を概観していく。

*

本書は2部構成であり、第1部は第1章から第5章、第2部は第6章から第11章が相当する。第1部ではイランを扱い、第2部では南アジア、アメリカ、イラク、レバノンといった各地のシーア派コミュニティを扱う。

序章「シーア派シンボル・宗教行事の出現と歴史的発展に伴うジェンダー的側面」は編者、カムラン・スコット・アガイエによる。本章ではシーア派の歴史の変遷、カルバラーのシンボルと宗教行事について概観した上で、すでに説明した本書の目的、問題意識、議論の内容を述べている。

第1章「ターズィエ——日常生活における歴史のねじれ」はネガール・モッタヘデによる。本来は歴史的出来事であるはずのカルバラーの戦いが、ターズィエ（殉教劇）の舞台上ではさまざまに変形されている。それは衣装がその当時のものとは違うという点や、女性の登場人物が男性や子どもによって演じられるといった点に見受けられる。こうした歴史的事実の翻案は、現代に見られるだけでなく、ターズィエの舞台を描いたカージャール朝期の絵画からも読み取れる。つまり、ターズィエには、本来の歴史的出来事をその時代時代の文脈の中で読み解いていくことで、歴史的出来事としてのカルバラーをその時代時代に結び付ける役割があるのである。

第2章「カージャール朝末期におけるムハッラムのシンボルと宗教行事のジェンダー的変遷」は、編者カムラン・スコット・アガイエによる。本章ではカージャール朝末期の史料から、カルバラーのシンボルや宗教行事に見られるジェンダーと女性の関わり方が考察されている。その結果、一連のシンボルと宗教行事には明確なジェンダー・コードが存在し、女性の社会的役割や公共空間への関わり方を大きく規定してきたが、逆に女性の社会的地位の向上や、公共空間への関わり方の拡大をもたらす際の根拠として機能する場合もあり、一連のシンボルや宗教行事は両義的な意味合いを持っていたことが判明した。つまり、女性たちがこうしたジェンダー・コードを巧みに使いながら、積極的に宗教行事に参加し、公共空間に繰り出し、人脈の拡大や社会的地位の向上、公共空間への参加を実現していたことにもカルバラー・パラダイムの役割が見出せるのである。

第3章は、イングヴィルド・フラスケルドによる、『『私の心は哀しい。ムハッラム、それはザイナブの月だ』——シーラーズにおける美学の役割と女性の哀悼行事』である。著者はここで、美的表現がカルバラーの出来事を可視的に生き生きとしたものにして人びとに受け入れやすいものにし、カルバラー・パラダイムを存続させる原動力となっている側面を論じている。その一例としてイランのシーラーズ地方では、視覚イメージや宗教行事の際に使う道具や祈祷文などの美的表現の積極的活用が極めて重要な役割を果たしていることを報告している。ポスターや絵画、タペストリーに描かれた視覚イメージは、人びとが共有するイメージを具現化させ、人びとがカルバラーの出来事を再構築する際の不可欠なツールとなっており、そのことは行事の際に使われるさまざまな道具や、ロウゼ（詠唱歌）、ノウヘ（哀歌）といったものにも共通する。

第4章、「カルバラーの娘たち——イラン、シーア派大衆文化における女性のイメージ」はファーエゲ・シーラーズィーによる。この論考は、イランのシーア派大衆文化、その中でも一般に流布しているロウゼやノウヘに関する教則本の中でカルバラーの女性たちがどのように描き出されているのかに着目した研究である。それらの教則本に見出されるカルバラーの女性たちには、明確な役割分担が存在しており、そのことによってカルバラー・パラダイムに一定の存続性が保証されている。ファールティマは理想的女性であり、なおかつ息子たちを殺されたことによる苦しみ、痛み、哀しみ

を持ちながらも、どちらかと言えば、武器ではなく口で戦う勇敢な女性であり、勇気や誇りを持った男性に劣らない女性として描かれている。ザイナブとは逆に、ルカイヤ、スカイナといった人物たちは、哀しみの象徴として描かれている。このように、カルバラーの女性たちは女性の持つさまざまな側面を分担していると考えられる。

第5章は、ペーター・チェルコウスキーによる「カルバラーの女性たちの図像研究——タイル、壁画、切手、ポスター」である。本章はタイトルの通り、カルバラーの出来事に関するさまざまな図像を分析し、カルバラーの女性たちの図像の変遷を明らかにしている。カルバラーの悲劇が表現されるのはターズィエの舞台上だけではなく、さまざまな平面媒体にも見出される。そしてその平面媒体もまた時代の変遷に伴って形態を大きく変化させている。近年のテレビや映画といった動画の登場によって登場人物に変化が生じていることはそのことを象徴するもので、それ以前のは全ての女性が顔を覆った状態で同じように描かれ、個々の身体的特徴は付与されていなかったが、テレビや映画の登場により、登場人物たちにある程度身体的特徴が付与されるようになった。だが、図像は他の媒体と独立して表象されているわけではなく、ロウゼ・ハーニーやターズィエ、そしてその背景にあるイランの人びとの信仰、文化、政治と密接に結び付いたある特定の価値と結び付くことによって人びとに認識されている。その点は歴史を通じて変わることはない。

次の第6章から第2部が始まることはすでに述べた通りである。

第6章、「カルバラーの語り手、サキーナ——パキスタンの女性のマジュリス（集会）における民族誌的記述」はシェミーム・バーニー・アッバースによるものである。本論考で著者はデル・ハイムズの『ことばの民族誌』の理論を用いて、ノウへの語り手によるサキーナ（スカイナ）の言説の言語社会的な位置付けを行っている。著者は2000年にパキスタンのラーワルピンディーのエマームバーレー（集会所）で行われたノウへの事例を中心に、デル・ハイムズによる SPEAKING の要素を利用して分析を行っている。「場所」ではエマームバーレー（公的なものか私的なものか、朝昼晩のいつに行うか）、「参加者」では参加者（主要な説教師であるザケレやロウゼ・ハーン、主催者、語り手、聴衆）、「理由（結果）」では主張（哀悼、会話、メッセージ、デモンストレーション、抵抗）、「行為」では形（物語、語り、呼応する形、解釈）、「基調」では雰囲気（悲しみ、情熱的、真剣さ）、「行為者（手段）」では言語（アラビア語、ペルシア語、ウルドゥー語、パンジャブ語）、「規範」ではレトリックの言説とその呼応や詩的表現とその呼応、「型（ジャンル）」ではマジュリスを分析する要素としている。

第7章は、サイエド・アクバル・ハイデルによる「サイエデ・ザイナブ——ダマスカスとそれを超えた征服者」である。本章ではザイナブを扱った代表的なウルドゥー語の説教と哀歌のレトリックが読み解かれ、後半では近代ウルドゥー語詩におけるザイナブの描かれ方が総合的に検討されている。前半ではウルドゥー語圏で現在でも大きな影響力を有するラシード・トラビーとアリー・ナキー・アル＝ナクビーが自らの説教の中でザイナブをどのように捉えていたのかに主眼が置かれている。彼らはザイナブの勇気、正義、英雄的行為を讃えて、ザイナブを盛んに称揚してきた。その背景には、スンナ派というマジョリティに囲まれているマイノリティとしてのシーア派という、当地域のシーア派が抱える問題が垣間見える。近代ウルドゥー語詩では、イフティハール・アリフやバルヴァン・シャキール、ヴァヒッド・アフタルといった近代ウルドゥー文学の作者の作品を対象としている。彼らによって描かれるザイナブはトラビーやナクビーの描き方と同じであり、やはり伝統的な肉親を失って苦しむ彼女の姿とは一線を画すものとなっている。

第8章の「南アジアのムスリム・イスマール派のジェンダーとムハラム月の宗教行事」は

レヘナ・ガディアリによる。スンナ派が最大勢力を誇る南アジアの中では、シーア派は少数派である。その中でもイスマイル派は少数派にあたり、ダーウード・ボーホラー派はその小さな一支派にすぎない。本論考はそのダーウード・ボーホラー派のムハッラム月の宗教行事への関わり方を主題とする。彼らの宗教行事には公共空間で行われるものから、家庭内で行われるものまでさまざまな行事がある。公共空間の行事に女性は参加するものの、そこでの主役は男性である。しかしながら、女性はどの行事にも参加できるが、男性が参加できない女性だけの行事は数多く存在する。特にムハッラム月からサファル月にかけては、マジユリスやハジャリ（女性たちが集まって共に食べる行事）が盛んに行われ、こうした私的空間ではむしろ女性が主役となる。これら宗教行事への女性の参加は、一方では女性を家父長的な社会基準の中に組み込む意味合いを持つが、他方で女性が家父長的な規範から逃れることを意味する場合もある。このようなジェンダー間の緊張関係がダーウード・ボーホラー派のムハッラム月の行事には存在する。

第9章、「カルバラーの女性たち、アメリカに行く——イラン、パキスタン、カリフォルニアにおけるシーア派の宗教行事」はメアリー・エレーン・ヘグラントによるものである。イラン、パキスタンからカリフォルニアに移住した移民女性を対象に、移住にともなうシーア派の信仰、行事、実践の変容を扱っている。カリフォルニアへ移住した者の中でも、イラン移民とパキスタン移民とは実態に大きな差が見られる。イラン系移民はシーア派の行事や実践をほとんど行わず、ごく一部の女性が行っているにすぎない。実践も本国とは異なり、男女が入り交じった形で行われたり、女性が行事進行の主導的な立場を担ったりするなどの変容が見られる。他方パキスタン系女性は本国の実践形態を保持しており、内容に大きな変容は見られない。こうした両者の違いの背景には、イラン系移民は中・上流階級の人びとが多く、現在のイラン本国との繋がりが稀薄であるのに対し、パキスタン系移民は非熟練労働者が多く、本国との密接な繋がりを保っているといった事情がある。

第10章は、エリザベス・ワーノック・フェルネアとバシマ・Q・ベズィルガンによる「イラクにおける女性の宗教行事」である。イラクには家族の健康や幸福を祈って女性たちの間で行われる多くの行事がある。2月に既婚の女性たちが集まって行われる「ザカリアーの祝宴」、ノウルーズ（イラン暦新年）近くに未婚の女性たちによって行われる「女性達の断食」、既婚女性によって行われる「アッパースの紅茶」、バグダード近郊、クテシフォンの「サルマーン・パークへの参詣」といったものがある。これらの行事は女性が主体となって行うが、男性もさまざまな形で参加する。逆に、男性が中心的役割を担うターズィエに女性も観客として参加し、男女が対を成す形で進められる行事もある。これらの事例から、一連の行事では従来中東地域で言われてきた女性が内、男性が外といった公私の区別は見られない。むしろ、それぞれの行事で男女がさまざまな形で参加していることがわかる。

第11章はララ・ディーブによる、「追悼から活動主義へ——サイイデ・ザイナブ、レバノンのシーア派女性、そしてアーシューラーの変容」である。本章では南レバノンのシーア派女性を対象に、彼女らのカルバラーの語りとその意味付けの変容を論じている。1970年代以降のシーア派組織や政党の結成と台頭、レバノン内戦、宗派対立といったレバノンの状況は、カルバラーの語りと意味付けに大きな変化をもたらした。それに伴って、南レバノンでは「伝統的な」語りとは別に、「真正な」語りが新たに出現してきた。特にザイナブの語りと意味付けに両者の間で大きな差異が見られる。前者は高齢の女性達によって担われ、フサインの殉教や、フサインの殉教を哀しむザイナブの姿が積極的に語られ、その目的も自らの来世への救済のためであった。一方で後者では若年の女性たちによって担われ、ザイナブの勇気、正義、悪に対する抵抗といったものが積極的に語られ、

その目的も抵抗や革命のために立ち上がることの重要性を説くためのものとなっている。

*

以上の内容を踏まえた上で、本書の位置付け、問題点、展望を述べていきたい。

まず本書が評価されるべき点は、大きく2つある。カルバラー・パラダイムの議論の適用範囲を、従来その中心であった政治的側面から広げた点と、イランという地域から広げた点である。従来の研究ではカルバラー・パラダイムの持つその包括的性格が指摘されながらも [Fischer 1980; Aghaie 2004]、政治的側面に注目が集まってきた。そのため、時代的にも政治的側面を描きやすいイラン革命やそれ以降の時代が対象になることが多かった。それに対して、本書はジェンダーという側面から、時代を問わずにシーア派の日常生活の中にカルバラー・パラダイムがさまざまな形で浸透しており、人びとの思考の枠組みをさまざまな形で規定していることを描き出している。カルバラー・パラダイムは政治的側面に集約されるものではなく、社会的・文化的にも幅広く適用できるものであることを、具体的事例で示した点は極めて重要である。ただし、編者自身が前書では「カルバラー・パラダイム」という語を用いながら、本書ではその語をあえて使わず、「カルバラーのシンボルと宗教行事」という語を代わりに使っている点は注目しなければならない。この用語法の背景には、編者自身が「カルバラー・パラダイム」という語が研究史の流れの中で担った意味合い、その政治的バイアスを意識し、巧妙にこの語を使うことを避けた節が見られる。この点、政治的側面以外の部分は、研究の途上であり、蓄積が足りないことを痛感させられる。

対象地域についても、従来の研究ではイラン研究に特化していた議論を、各地のシーア派全体にまで広げ、従来地域ごとに研究されてきたシーア派の研究を、カルバラー・パラダイム、その中のジェンダー的側面からシーア派全体としての枠組みで捉えようとした点は大きく評価できる。これにより、カルバラー・パラダイム議論が従来中心的存在であったイラン研究の枠から一步踏み出したと考えられる。

本書のもう1つの重要な点をあげるならば、カルバラーの女性たちに着目した点である。ザイナブヤルカイヤ、スカイナといったカルバラーの女性たちは近年シーア派の人びとの間で注目されるようになり、この動きは現在まで継続している。本書の各論文が描き出しているように、カルバラーの女性たちは地域を問わずに人気を集めている。カルバラーの女性たち所縁の名所が数多く存在するシリアへの参詣が近年盛んになり、現在では年間200万人を超えていることは、彼女らの人気を客観的に示す現象であろう。従来の研究は彼女らに言及するものの、主たる研究対象としてこなかった。本書がカルバラーの女性たちを議論の中心に添えたのは、大変意義のあることである。

上記の肯定的評価の一方で、問題点がいくつか存在する。第1に、イランとイラン以外の地域の研究蓄積の差が如実に現れている点である。第1部のイランに関する各論文は、研究蓄積と相まって、カルバラー・パラダイムを意識した構造のしっかりとした論考となっている。その一方で、第2部の各地のシーア派コミュニティに関する論文では、こうした枠組みがまだはっきりと認識されていないためか、全体的に質が低いという印象を受ける。第11章のララ・ディーブ論文は例外的にレバノンの事例からカルバラー・パラダイムの変容を描き出す興味深い内容になっているが、他の論文、特に第6章、8章、9章、10章の4つの論文は、各地域の女性の現状を描き出すだけに留まっている。第6章の論文は、デル・ハイムズの理論を持ち出しているものの、的確な分析になっているかどうか疑問を感じる。

さらに用語表記がペルシア語に統一されていることも問題である。本書が対象とした地域ではペ

ルシア語以外にも、アラビア語、ウルドゥー語、英語が存在するが、そうした差異があることを認めた上で編者は敢えてペルシア語に用語表記を統一している。イラン以外の地域のシーア派に関する研究は近年徐々に蓄積されつつあるが、イラン研究との間に質・量ともに大きな差があることの影響はここにも現れている。イラン以外の地域の研究蓄積が待たれるところであろう。

第2の問題点は、本書はカルバラー・パラダイムをイラン以外にも広げようと試みたが、地域間の関係が必ずしも明確になっていないことである。カルバラー・パラダイムが各地域で独自に変遷してきたのか、それともイランのカルバラー・パラダイムが各地に浸透していったのか。あるいは、地域間で相互に影響を受けながら変遷してきたのか。イラン以外の地域にも議論領域を広げたのにも関わらず、この点が明確にされていなかった。今後カルバラー・パラダイムの議論を進展させるためには、この論点は必ず付きまとうだろう。

最後にもう1点、本書ではアーシューラーやアルバイーン、ターズィエといったカルバラーのシンボルや宗教行事が分析の対象となってきたが、参詣もこの中の一つに含まれるべき重要なものである。イラクのカルバラーへの参詣が歴史的に重要であることは何度も指摘されてきた [Nakash 1994; 守川 2007]。カルバラーへの参詣に限らず、カルバラーの悲劇にまつわる廟への参詣の重要性は現在でも増えこそすれ減じてはいない。参詣とカルバラー・パラダイムの関連を明らかにしていけば、カルバラー・パラダイム論の有効性を高め、地域間の有機的つながりをより明確な形で把握することができるだろう。

本書はカルバラー・パラダイム議論の可能性を広げたことで極めて有益なものになった。その反面、イランとそれ以外の地域の研究蓄積の差も顕在化している。今後この分野の研究の蓄積が待たれるところである。

参考文献一覧

- ハイムズ, デル 1979 『ことばの民族誌—— 社会言語学の基礎』 (唐須教光訳) 紀伊國屋書店。
- 守川知子 2007 『シーア派聖地参詣の研究』 京都大学学術出版会。
- Aghaie, K. S. 2001. “The Karbala Narrative in Shi’i Political Discourse in Modern Iran in the 1960s-70s,” *The Journal of Islamic Studies* 12(2), pp. 151-176.
- 2004. *The Martyrs of Karbala: Shi’i Symbols and Rituals in Modern Iran*. Seattle: University of Washington Press.
- Dabashi, H. 1993. *Theology of Discontent: The Ideological Foundations of Islamic Revolution in Iran*. New York: New York University Press.
- Dabashi, H. & P. Chelkowski. 2000. *Staging a Revolution: The Art of Persuasion in the Islamic Republic of Iran*. London: Booth-Chibborn Editions.
- Fischer, M. M. J. 1980. *Iran: From Religious Dispute to Revolution*. Massachusetts: Harvard University Press.
- Nakash, Y. 1994. *The Shi’is of Iraq*. Princeton: Princeton University Press.

(安田 慎 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)